



英国風庭園に新しい魅力をプラス

「イコロの森」をご存知でしょうか。千歳空港から車で15分くらいのところにある、とてもおしゃれなイングリッシュ・ガーデンに、レストランやカフェ、乗馬クラブなども併設された人気の屋外施設です。

都会の人が「自然」という言葉を使う時、本当に自然な森林をイメージする場合と、人が手をかけたお庭をイメージする人がいますが、その両方が一緒になっているような場所です。

開園当時は、炭焼き小屋を建てて森づくりもやる、という計画だったそうですが、ガーデナーさんは庭造りに集中せざるを得ず、森の手入れは進んでいませんでした。そこでイコロ側から、苫小牧市内のあちこちで森の活動をしていた私たちに「手伝って欲しい」と声がかかったのが、この活動の始まりでした。

私たちは林業従事者ではありません。親子の課題を克服するためのコミュニティをつくりたい、その手段として森づくりの活動が役に立つと考えて、「コミもり活動」と称して森の手入れをしてきたボランティアグループです。

いっぽうイコロは、ガーデニング好きの中老年や、花を愛でながら俳句や短歌をたしなむといったお客さんがメインで、地元の一般市民にはちょっと敷居が高いというか、気軽に遊びに行ける場所ではありませんでした。

今回イコロの森に「コミもり活動」への賛同を得たことで、ヘルメットをかぶった僕らや、子どもたち・親子連れが、園内にドカドカと入っていくことが少しずつ認知されるようになりました。

森の中に子どもの仕事場ができた

幼児とその保護者を対象にした「森のようちえん」を毎月開いているほか、イコロと共催で200人規模の体験イベントを2回開きました。

イベントに集まった子どもたちに、私はこう言います。「君たち、“森林体験”とかさせられると思ってここに来たでしょ？全然違います。きょうは働いてもらいますから」。

子どもたちは「えーっ？」とか言うわけですが、たとえば子どもでも安全に動かせる手動の薪割り機の使い方を教えると、彼らは熱中してずーっと薪を割ってくれます。

また夏休み期間に、幼稚園児と小学校低学年を対象に「サマースクール」を開設し、毎日イコロに遊びに来られるようになりました。夏休みの子どもの世話は、働いているお母さんたちにはけっこう大きな課題なんです。森が安全で楽しいと分かると、保護者の出勤・退勤の車で森の入り口に送り迎え、という形で子どもたちが森に通ってくるようになりました。

こうしてだんだん森の利用者が増えてきましたが、よく「雨が降ったらどうするの？」と聞かれます。さいわいイコロの森には庭園の苗木を育てるための巨大なビニールハウスがあり、繁忙期以外はそこを使えるので、雨でも問題ありません。来年度は地元の小学校がイコロの森で一泊学習会を計画しています。

イングリッシュ・ガーデンは積雪期には閉鎖されますが、私たちが冬の活動を始めてから親子連れなど新しい利用者が増え出して、レストランやカフェの冬季稼働率に少しは貢献できていると思います。

子どもたちと一緒に作った薪は実費で頒布しています。森の手入れで出る材ですから、樹種・サイズはバラバラです。でも、子どもたちが活動する森づくりに確実に循環させることを念頭に、希望する方に販売しています。

このように、私たちの活動のメインは森の手入れ自体ではありません。コミュニティの再生のため、何かおもしろいチャンスを生むための方法・技術として、この森の整備を進めています。この交付金の後押しのおかげで、だんだん目的を実現できてきました。



報告者

上田 融さん

